

山の宗教：山岳信仰と修験道

金峯山寺は、日本古来の自然崇拜に、仏教や道教などが習合した修行をともなう山岳信仰の一形態である、修験道の根本道場です。日本では何世紀にもわたって山が仏神が住まう場所として、また神そのものとして崇められてきました。

役行者（634–701）が7世紀に修験道を創開した後、多くの山が神聖なものとして崇拝されるようになりました。

修験道の行者は、厳しい修行をすることで、罪や汚れを捨てて、生まれかわることを目的にしています。

一般的な修行では、山の中、長い距離を歩き、険しい岩場の登り下りをします。これらの修行は験力と呼ばれる、超人的な力を得ることを目的としています。

明治時代（1868–1912）に仏教と神道が強制的に分離される前に一般的だったように、修験道は仏も神も等しく崇めており、この宗教は悟りを求めるあらゆる人々に開かれています。修験道の信者は僧侶である必要はありません。

役行者は出家しておらず、生涯を通じて在家として信仰を実践しました。彼は、仏法の実践と自然から力を得ることによって民衆を救いたいと考えました。これは今日まで修験道の中心的な理念となっています。